

吹田市立博物館

博物館だより

NO.15

SUITA CITY MUSEUM



玉堂富貴図 金子雪操筆

市制施行60周年記念

「収蔵品展—受け継がれてきた吹田の文化財—」

平成12年10月21日(土)～12月3日(日)

この収蔵品展では、これまで博物館に収蔵されてきた資料のなかから、仏像・仏画・近世書画・甲冑・刀剣・中世文書など、市内の寺院や旧家などから寄贈・寄託された美術作品等34件を紹介します。なかでも、今回初めて紹介する大坂画壇の文人画家金子雪操の作品9件12点は、この展示の中核となっています。残念ながら、金子雪操の名は一般にあまり知られていませんが、吹田とゆかりの深い画家であり、江戸時代後期の吹田の文化を語るうえでも重要な人物といえます。ここでは、金子雪操の人物像にスポットをあててみたいと思います。

金子雪操は、名は**大美**、字は**不言**といい、寛政



写真1 米法山水図

6年(1794)、江戸の幕臣犬塚家に生まれました。幼少の頃金子家の養子となり、伊勢長島藩主増山正賢に近侍したといえます。正賢は、雪斎と号し、文雅の嗜み深く、自らも書画をよくし、ことに花鳥画に巧みであったといわれています。雪操は、雪斎より画の手ほどきを受け、雪の一字を貰い受けて雪操の号を与えられます。

後に仕を辞した雪操は、髪を剃り、各半道人と号し、本格的に画事の道を歩みます。当時文人画家として著名であった越後の銅雲泉のもとに参じ、中国南宗画の伝統を継承した山水の画法を学びます。雲泉は文化8年(1811)に没していますので、雪操が雲泉の門下にあったのは、十代半ば頃から十七歳頃のことと考えられます。その後、漢詩人大窪詩仏に詩を学び、加賀に一時期滞留、のちに京都に住み、加茂の書家に書法を学びます。

詩書画を学んだ雪操は、四十歳頃に大坂の堂島桜橋に移り住み、画事三昧の日々を送ります。この頃の雪操は、狭い裏長屋で、日々古法帖や画譜の模写に明け暮れたといえます。その頃の雪操の貧困と金に無執着な性格を語る逸話が残されています。米を買う金がなくなった雪操は、友人の八木巽處を訪ね、自分の描いた小景山水十二枚を金一分に換えてもらいます。巽處に飲食のもてなしを受けた雪操は、帰る道すがら、明月を眺めようと天神橋の欄干にもたれ、やがて寝入ってしまいます。夜明け方目覚めた雪操は、傍らにいた貧しいみなのひとに声をかけられ、眠っている最中懐から袋が抜け落ちたからと、金のはいった財布を手渡されます。雪操はお礼をいい、昨夜巽處から受け取った金一分を与えて去っていったそうです。

こうした雪操の真率な人柄をよく理解して援助を惜しまなかったのが、当時吹田村竹中知行所の代官をしていた井内左門です。左門は、経雨楼と号し、文芸を好み、頼山陽・市川米庵・田能村竹田・田能村直入など、多くの文人墨客と交遊した人物でした。左門の招きにより、天保8年

(1837)、雪操四十三歳の頃僅かばかりの家財を船に積んで吹田に移ってきました。以後八、九年ほど吹田に寓居し、その間に髪を蓄え、妻を娶ったといひます。雪操には、各半道人・有情痴者・塵海漁者・美翁など数多くの号がありますが、吹田に滞在していた頃使っていた号に「翠陀小隱」があります。翠陀は、「すいた」と読み、吹田と音が通じており、吹田に隠棲する者という意味が込められているのでしょう。雪操は、後に再び大坂に出て釣鐘町に住み、安政4年(1857)八月五日、六十四歳で亡くなりました。雪操の墓所は、大阪市天王寺区勝山の黄檗宗清寿院(通称南京寺)にあります。

雪操は、さきの逸話からもわかるように金銭に拘泥せず、貧窮のうちに一生を終えました。あまりに清廉すぎた雪操は、人の好き嫌いも多く、骨董商や表具師が、みだりに人物を批評したり、絵の優劣を語ることを嫌い、こうした人々と交際しなかったため絵はあまり売れなかったといひます。しかし、吹田市内には数多くの雪操の作品が確認されており、雪操の絵を賞翫し、援助した



写真2 合歓鶴図



写真3 関聖帝君図

人々がいたことを裏付けています。その一人が氣比紅友で、氣比家には、雪操の絵画十一幅、書跡一幅、雪操の書画を貼り交ぜた屏風一隻が伝わり、平成8年度に市立博物館に寄贈されました。

これらの作品のなかで最も多いのが山水画で、銅雲泉のもとで中国南宗画の様式と技法を学んだ雪操の画風を伝えています。「米法山水図」(写真1)は、北宋の画家米芾のあみだした米法山水の画法にならって描かれた作品で、輪郭線を用いず、筆点をならべた山塊の峻の表現や、雲煙につつまれた湿潤な空気の表現にその特徴があらわれています。雪操は山水画だけでなく花鳥画にも巧みで、「玉堂富貴図」(表紙写真)は、富貴を象徴する牡丹を主題に、馥郁と咲く花を生き生きと描き出し、尾羽をびんとたて合歓の木の側で休らう鶴鴒を淡い色彩を加えて活写しています。また、人物画としては、「関聖帝君図」(写真3)があり、中国の武将関羽を濃密な賦彩で威風堂々と描いています。このように雪操は、山水画を基盤に花鳥画や人物画など、多様な画題と画法を身につけていたことがみてとれます。この展示では、吹田に伝えられてきたこれらの作品をとおり、金子雪操が繰り広げる豊かな画境を味わい、楽しんでいただきたいと思います。

博物館と展示

—特別展『農耕の風景—摂津の四季耕作図—』をふりかえって—

吹田市立博物館では、4月15日から6月18日まで特別展『農耕の風景—摂津の四季耕作図—』を開催しました。今回は、その成果と博物館と展示についてこの特別展を例に少し考えてみたいと思います。

四季耕作図は、近年、各地の博物館、資料館でも展覧会が企画され、それに伴い、関心が高まり、研究が進んできたテーマです。研究の進展に伴い、四季耕作図の多くが粉本によって描かれてきたこともわかってきています。

この展示はタイトルのとおり、旧摂津地域における特に民間に残されてきた四季耕作図を中心に集め、そこから何が見えてくるか。描かれた情報や地域性を見いだそうということでした。そして、結果、一年間の風物詩を描く、月次絵（四季絵）の伝統を継承した作品が多く、日本における四季耕作図の誕生に大きな影響を与えた中国の耕織図やその作風を継承した狩野派の影響はあまり受けていな

い和様の風俗描写が多く、江戸時代後期の大坂における上方画壇を反映した作品が多いことや、当時の上方画壇と江戸画壇との相違なども見いだせました。

展示では、この展示目的を理解していただくために、描かれた内容から情報を引き出すことにしました。そして、その場合、各作品が何に基づい



女大学宝箱（大阪府立中之島図書館蔵）粉本



四季耕作図屏風（谷田史朗氏蔵）



絵本通宝志（静岡県農業試験場蔵）粉本

て描かれたかを知りたいへん重要であるため、各作品の手本となった粉本を特定し、それを紹介するような形をとり、手本となった部分と絵師のオリジナリティーの部分进行明らかにしようと努めました。しかし、実際、観覧者の方々の多くは美術鑑賞の対象として作品と向き合う場合が多く、作品の多くに粉本が用いられていることを知ることや、その描かれた内容から情報を読み取っていただくことは意外と困難であり、どこまでこうした意図が伝わったか、甚だ心許無いところです。適切に情報を伝え、モノを見ていただき、わかていただく手助けとなる展示技術の向上とそのための方法をさらに追求し、より良い展示のあり方を模索していく必要を感じています。

また、特別展の会期中や会期後に展示を御覧いただいた方から四季耕作図に関する新たな情報を提供していただくこともありました。これは、展示の場が博物館からの一方的な情報の提供ではなく、利用者の方々との情報の交流の場になることを示しており、こうした情報はさらなる資料の掘り起こしにもなりました。展示だけでなく、あらゆる面において、こうした博物館と利用者の方々との相互補完が必要と思われます。

ところで、博物館の持つ特色の一つは、モノを展示することによって、何らかの情報を伝えるということです。また、このことによって博物館はモノを見ることによってその視覚から情報を得て学習する場を提供する唯一の施設でもあるわけです。博物館の展示とは、先の特別展の例のように展示を担当したものが、自らの問題意識に従って調査研究した成果を提示し、観覧者にそれを伝え

るべく、様々なモノや装置（仕掛け）を展示室に配置しています。ところが、先の特別展で観覧者の多くの方々が展示意図とは別に美術作品として鑑賞していただいた例のように、モノには企画者が伝えたいと思う情報以外にも様々な情報があり、そのモノから何を感じるかは、見る人によって異なり、また、同じである必要ありません。そうした意味では、必ずしも展示意図にこだわって見ていただく必要もないわけです。そして、さらには、普段、文字やことばから情報を得ることが多く、それに慣らされた私たちは、ともすれば、こうしたモノからの情報を読み取ることに不慣れで



農耕蒔絵杯

す。博物館の仕事は、展示を通してモノから何かを見つけていただくきっかけとその手助けを行うことにもあります。そこで、資料の一面のみを見せるだけでなく、いろいろな角度から資料を見ることができるよう配慮も必要です。情報を読み取る手助けとなるべき展示技術の重要性はここにもあるわけです。つまり、博物館はモノを通して情報を伝えていく場であり、モノから情報を得ること（モノを見ること）を学習する場でもあるわけです。

今後とも、こうした展示の意義の多様性をふまえて広い視野をもったわかりやすい、よりよい展示をめざしていきたいものです。

市内の出土文字資料—墨書土器その2—

「難波津の歌」が書かれた土器

なにはづにさくやこの花冬ごもり
いまははるべとさくやこの花

『博物館だより』第6号において「市内の出土文字資料—墨書土器その1—」として垂水南遺跡（吹田市垂水町3丁目）第5次発掘調査で検出された歴史時代河道跡の堆積土内から一括して出土した44点の墨書土器について紹介しました。そこでは、垂水南遺跡の西方約700mには東寺領垂水荘があり、これらの墨書土器の中に「垂庄」「中庄」の文字を記した土師器皿があること、共伴した土器も供膳・煮沸・貯蔵のセットが揃い、都からの搬入品であること、土器の年代も平城宮大膳職跡の井戸SE311Bを指標とする西暦825年頃（平城宮Ⅶ期）の土器と類似し、垂水荘立荘の弘仁3年（812）とおおむね合致することなどから、垂水荘の成立を物的に裏付け、かつ東寺による垂水荘の積極的な経営への着手を示唆する資料として重要なものであることを述べました。その44点の墨書土器一括資料には何らかの文章を書いたと思われるものが2点あり、その後の調査によりうち1点が、冒頭に掲げたいわゆる「難波津の歌」として著名な和歌の一部であったことがわかりました。



底部外面

難波津の歌が書かれていたのは、土師器皿の底部の破片で、現存の形は上辺3.3cm、下辺5.5cm、高さ4cmの台形状をしています。文字はその両面に書かれてました。土器を製作するときについた調整痕からみて、皿の内側に3行にわたり「尔波津尔佐久／己毛利／佐久」の11字の文字が確認できます。外側には「部止佐」の3字とその右に2字分の墨痕が残り、本来は皿全体に全文が書かれていたと思われます。その書体についても、平安時代初頭と考えられ、土器の編年と矛盾するものではありません。

古代において難波津の歌は、仮名の続き書きを習うのに用いられた歌でした。延喜5年（905）に紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑らによって編纂された最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の仮名序にその全文が載り、『万葉集』卷十六に見える「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」の歌と並んで「このふたうたは、うたのち、は、のやうにてぞ、てならふ人のはじめにもしける」と記されています。

実際にこの難波津の歌が手習いの歌として用いられていたことは、発掘調査によって出土した墨書土器や木簡に難波津の歌が書かれていたことから知ることができ、こうした出土資料は、垂水南

部止佐

部止佐

遺跡の出土例を含めてこれまでに16例が知られています（森岡隆「仮名発達史における難波津の歌」『書学書道史研究』第9号 1999年）。その多くは平城宮・長岡宮といった宮城跡で出土したもので、奈良時代には平城宮の官人の間では難波津の歌が習書・落書の題材として普及していたことがわかってきました。また最近では、阿波国府跡と推定される徳島市国府町の観音寺遺跡から出土した西暦680年前後のものと思われる木簡に「奈尔波ツ尔佐久矢己乃波奈」と記されていて、さらにその年代は溯り、すでに天武天皇の頃には書写されていたことが明らかになりました。また、これは畿外の地で出土した唯一の例であり、難波津の歌が地方にも広く流布していたことをうかがわせるものでもあります。

さて、垂水南遺跡の「難波津の歌」墨書土器を他の出土例と比較してみると、いくつかの特徴があります。まず、遺跡の性格をみると上記のように難波津の歌の墨書土器や木簡の出土は宮城跡が大半で、垂水南遺跡のように荘園関係の遺跡からの出土は唯一の例となっています。内容的にみても、平城宮の遺例は「奈尔」「奈尔波」など初めの2～3字のみが多く、難波津の歌がどのような万葉仮名で表記されていたのかを知る上で第三句と下の句が残っているのも貴重な例です。

さらに興味深いことは「津」の用字です。万葉仮名では「つ」の音を仮名表記する場合、「都」「川」「ツ」「津」の用例が知られています。平安時代初頭にはこれらが併用されており、前出の平

城宮跡井戸SE311Bからも難波津の歌の墨書土器が出土していますが、ここでは「川」が使われています。神崎川右岸にある垂水南遺跡の地理的な位置を考えた場合、本資料において港をも意味する「津」が使われていることは、当時難波津の政治的位置は低下していたとは言え、その筆者に難波津（あるいは難波の地）そのものが意識の中にあったと言えないでしょうか。難波津の所在地については諸説あり、いまだ確定されていませんが、垂水南遺跡の「難波津の歌」墨書土器は難波津に最も近い場所で書写されたものであり、荘園の荘官の手すさびの結果としてだけではなく、地域のもつ地理的な景観を語った歴史資料として重要な資料でもあるのです。



習書した墨書土器



底部内面

☐ (尔)
☐ 波津尔佐
☐ 己毛利
☐ 佐久

彼集六依
 比毛利
 久

催し物のご案内

展覧会

◆10月21日（土）～12月3日（日）

市制施行60周年記念

収蔵品展—受け継がれてきた吹田の文化財—

月曜日と11月24日（金）は休館

講演会

11月5日（日）午後2時

「大坂画壇と吹田—文人画家金子雪操をめぐって—」

講師 大阪芸術大学教授 田中敏雄氏

聴講無料・先着順120名

展示解説

11月25日（土）午後2時

◆12月20日（水）～平成13年3月18日（日）

特別企画 むかしのくらしと学校

明治、大正、昭和初期にかけての衣食住の生活用具、また、学校や子どもの学習用具、遊びについてその移り変わりを展示します。

利用案内

●開館時間／午前9時30分～午後5時

●休館日 月曜日と祝日の翌日

年末年始（12月28日～1月4日）

吹田市立博物館だより 第15号
平成12年9月30日発行
吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL. (06) 6338-5500
FAX. (06) 6338-9886

常設展示トーク

本館学芸員が常設展示の解説や参加者の方々からのご質問にお答えします

10月22日（日）新芦屋古墳—木室古墳の謎—

（藤原 学）

11月26日（日）蔵人遺跡

—考古学からみた中世村落—

（高橋真希）

12月17日（日）近世の旅と名所図会（田口泰久）

1月28日（日）むかしのくらしと学校（藤井裕之）

2月25日（日）山田銅鐸—銅鐸とは何か—

（高橋真希）

3月25日（日）泉殿宮の神楽獅子（藤井裕之）

※10月22日と11月26日には特別陳列の展示解説も併せて行います。

交通案内

●J R 岸辺駅下車徒歩25分

●J R 吹田駅・阪急吹田駅から

桃山台駅前ゆき、山田榎切山ゆきバス

「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス

「岸部」下車徒歩10分

●阪急南千里駅からJ R 吹田ゆきバス②、③系統

「佐井寺北」下車徒歩10分

